
決闘者御一行、遊戯王ZEXALへ。

ワンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決闘者御一行、遊戯王ZEXALへ。

【Nコード】

N5069Z

【作者名】

ワンダー

【あらすじ】

大会帰りにどういう訳か「遊戯王ZEXAL」の世界に迷い込んでしまった高校生5人。彼らは元居た世界に帰るために奮闘する。しかし世界は、彼らは次第に「No.」を巡る戦いに巻き込まれる。果たして彼らは無事に元居た世界へ帰ることができるのか!?

Standby Phase

「いやー三位入賞とは惜しかったな江藤っち」

「むしろ【カエル】で三位まで行けたのは凄いなと思うんだが」

「サガだって二位だったじゃん。やっぱ回るね【シューティングスター】は」

「お前……………それは特に活躍できなかった俺らに対する当てつけか？」

「そんな『一位しか視野に入ってますん』みたいな言い方ムカツクわあ……………」

「ちつとは敗者を労りやがれ」

「相手が悪かったろうよお前ら三人は。【デッキ破壊】に【図書エクス】に【フルバーン】じゃしゃーねーよ」

「【図書エクス】とか大会だとほぼ絶滅危惧種だぜ。貴重な体験だったと思っときなよ」

夕方の電車の中。

私服姿の高校生五人が、会話をしながら楽しげに笑う。

彼らが話しているのは、『遊戯王デュエルモンスターズ』というカードゲーム。

KONAMIから発売されている、日本原産の世界的カードゲームの一つである。

勿論、それは日本でも人気があり、一年を通して様々な場所でKONAMI公認・非公認を問わず大会が開かれている。

彼ら五人も、今日開催されたデュエルモンスターズの大会に参加した帰りである。

たった五人しかいない田舎路線の電車の中、今日の大会の事を思いだし会話を重ねる。

対戦相手の使ったデッキ。自分のすっかりでやってしまったプレイミス。初手の手札で事故を起こしたこと。切り札を召喚し勝負を決めたこと。

様々な事を彼らは話し、笑った。

だが、その表情にはどこか悲しげな物も混ざっている。

「はあーしかし、今日で一旦遊戯王とはお別れか」

「しゃーねーよ。俺らもう受験生だ。大学入試が終わってからまたやればいいさ」

「俺ら志望校も一緒だしな」

「端から見たら仲良すぎて引くレベルだと思うぞ俺ら」

「これで一人だけ落ちたら洒落にならないぜい」

そう、現在彼らは高校二年生。そして、今の季節は冬。

彼らの通っている高校は進学校であり、学年主任の教師からは何度も何度も学年の集会で『今は大学受験への大事な時期だ！』と口うるさく言われている。

あくまで学生の本業は勉強。流石にカードゲームにかまけて大学に落ちたのでは洒落にならない。

そう思い彼らは今日参加した大会を最後に、大学受験が終わるまで遊戯王デュエルモンスターズを封印しようと決めたのである。

彼ら五人は、全員が全員そう付き合いが長い訳ではない。

幼稚園来の幼なじみもいれば、中学で知り合った者、また高校に入學して知り合った者と様々。

だが彼ら五人は、他の面子との関係は何かと聞かれれば、迷い無く『親友』と答える。

それほどまでに、彼らの仲はいい。
そして、彼ら五人を結びつけたのは、『遊戯王デュエルモンスターズ』だ。

彼ら五人にとって、『遊戯王デュエルモンスターズ』とはそれほどまでに特別な物だ。

だから彼らは、『遊戯王デュエルモンスターズ』を一時的に辞める事にした。

また五人で、笑って遊戯王をするために。

「お、もう着いたのか」

彼らの内の一人が気が付いたようにそう言った。

見ると、既に彼ら五人が降りる駅へと電車は着いたようだ。

彼らは自分のカードの入った鞆を持って電車を降りた。

「なんか、コレで家帰ったらしばらくこのデッキともお別れと思うと寂しくなるな」

彼らの内の一人は、しみじみとそう言った。

「ま、一生できない訳じゃねーよ」

「でも新しいパック発売されたらちよっと揺らぐかも」

「オイ馬鹿ヤメロ」

「裏切る気がテメエ」

ウリウリと彼らはじゃれながら階段を下りる。

だが、顔に出さないだけで、その寂しさは全員が感じていた。

やはり、物心付いた頃からふれあってきた思い入れのあるカードゲームだ。

それを一年とは言え辞めるのには決心が必要だった。

だが、仕方ない。自分たちは学生なのだから。

受験に落ちて、沈んだ心で決闘デュエルをしても楽しくはない。

そう思って、五人は階段を下りた。

だが、それは偶然なのか、はたまた必然なのかそれは定かではないが。

この後僅か数秒後、彼ら五人は数奇な運命に巻き込まれる事となる。

彼ら五人は、そんな寂しさを抱えながら、自宅へと帰宅するためその駅の北口へ出た。

そこで彼らの目に飛び込んできたのは、彼らの住む少し寂れた田舎と都会の中間地点のような街並みではなく、

どこか近未来を思わせるような、彼らの住む町とはほど遠い光景だった。

「へ？」

「は？」

「うん？」

「あれ？」

「あ、あ？」

三者三様ならぬ五者五様の反応で、彼らは驚きを表した。当然である。彼らの住む町、と言うか現代日本では見ることはないような街並みが目の前に広がってるんだから。

「……………降りる駅、間違えたか？」

「そんな訳無いだろ」

「てか、何処で間違えたらこんな所に来るんだ？」

「とりあえず戻ろうか？」

「そつだ、今さっき俺ら降りてきたばっか……………」

そう言って、彼らは今出てきた駅に戻ろうと振り返った。が、そこで愕然とした。

彼らの後ろにあったのは、先程降りてきた自動改札もないような寂れた駅ではなく、街並みにふさわしい近未来的なデザインの真新しい駅だったのだから。

そして彼らは驚愕で気づいていないが、すぐ側にある駅の案内板にはこう書かれている。

『現在位置：ハートランドステーション・北口』と。

ここは『遊戯王ZEXAL』の世界。

そしてその舞台、『ハートランドシティ』。

笹垣ささがき悠ゆう。
江藤えとう一いち。
山辺やまべ良介りょうすけ。
石崎いしざき琢磨たくま。
成田なりた孝太郎こうたろう。

彼ら五人が『遊戯王デュエルモンスターズ』を離れるのは、まだまだ先の事になりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5069z/>

決闘者御一行、遊戯王ZEXALへ。

2011年12月17日02時55分発行